

田園の作業場から世界へ。 どこにもなかった薪ストーブ

ヒミエルストーブ 西岡聖治さん



理想の薪ストーブ、
ないならつくろう、つくれるやる!?

薪ストーブといえば、海外製がイメージされるが、播州地方でつくられている薪ストーブが一部ファンの間で話題になっている。すべてハンドメイド、しかもたった一人のメーカー、その名も「himiel stove（ヒミエルストーブ）」だ。

揖保郡太子町。新幹線の高架下にボツンと建つ作業場で、西岡聖治さんがストーブづくりを始めたのは5年前。憧れの海外製薪ストーブを購入し、期待に胸を膨らませ薪に着火。そのままたた寝……のはずが、寒くて目が覚めた。寝入った頃に鎮火し、その後もつては消えて、のくり返し。（これから、どれだけ大量の薪が必要になるのか……憧れていただけに腹が立った。ないなら作ろう。これくらいつくれるやろ。「そこらが地獄でした（笑）」。

身につけていた溶接技術を駆使し、既存のデザインを参考にしたストーブをつくって販売したが、全く売れなかった。当たり前だった。あれほど落胆した「オシャレだけど燃えないストーブ」を自分もつくっているではないか。もう一度考えを整理して、自分が欲しい性能を持った薪ストーブをつくらう。思い描いた理想形は「燃費が良くて、料理にも使える薪ストーブ」。そこから、西岡さんの「仮説→実験→検証」の日々が続いた。

熱を内部で攪拌させる、 独自の燃焼構造で特許を取得

本業の製造エンジニアとして得た収入のほとんどを、薪ストーブ開発につぎ込んだ。一年に100日は薪ストーブのために時間を割き、毎年100万円以上は薪ストーブの開発に投資した。その間の売上はゼロ。しかし、やればやるほど、惜しい点が見えてくる。諦めようとは思わなかった。

実験を重ねるうちに、薪ストーブは、煙突を含めたトータルなシステムだということがわかってきた。薪ストーブは、煙突部でドラフト（煙を排気する上昇気流）を発生させて、薪を燃やす酸素を取り入れるのが基本の原理。西岡さんは、薪から発生する熱そのものを生かすために、煙突から出る熱を強制的に降下・滞留させ、放熱させる「ロケットマスヒーター」の仕組みに注目した。燃えた木から発生する可燃性ガスと空気を、ストーブ内部で強力に攪拌させることで高温を発生させる、独自の燃焼構造「サイ

クロンチューブ」を発明し、特許も取得。薪の消費量も大幅に削減した。材によって異なるが、長さ約40×6cm角の広葉樹材2本で、約1時間燃焼し続けることが可能で、薪に内包された燃焼成分がなくなるまでしっかりと燃えるので、煤や煙が出にくい。さらに、不慣れな人でも手入れしやすいシンプルな構造にもこだわった。



燃やした薪の木質ガスと空気を攪拌させ、高温を発生させるサイクロンチューブ。耐久性に優れ、ワンタッチで交換可能。

ユーザーとつくる、 これからの「ヒミエルストーブ」

ヒミエルストーブは、今もバージョンアップを繰り返している。使い続けるオーナーから要望を聞き、不具合があればオーナーのもとに出向いて改良。同じ型を購入した人全員にも改良に必要な部品を郵送している。「僕がいいと思うものを、いいと思うってくれる人に届けよう。そう自分の気持ちが明確になったときに転機だったのかなと。おかげさまで今、お客さんから依頼が続いているので、それでよかったんだと思います」。

SNSで発信される西岡さんの薪ストーブづくりには、海外からのリアクションも増えているほか、購入希望者が作業場を見学しに日本各地から訪れている。「あの3年は時間軸的には長かったけど、心理的には短かった」。

事業として軌道に乗り始めたのは2019年。新規注文や取材依頼が殺到しているこの冬、西岡さんのアツくて多忙な日々が続いている。



マエストロを変えた一冊

ジョーセフ・キャンベル著『神話の力』。「困難に打ち勝って成長する、という共通のフォーマットでも、国や民族の違いで解釈も変わってくるのが興味深い。14年くらい前に買って、目についたときに読んでいます。挿絵も面白いんです」。



マエストロの休日

独立後は「勉強」が趣味に。通信制の放送大学を卒業後、MBAへ進学。算数・数学を学び直すために、地域の子どもたちに混ざって「公文」の教室にも通った。現在は英語に夢中。オンライン学習の他、5冊のテキストを毎日3ページずつ同時進行で学習中。「今朝もやってきました」。



西岡 聖治

1974年神戸市垂水区生まれ。高校卒業後、派遣社員、会社勤務等を経て技術エンジニアとして独立。2015年頃より薪ストーブ製造を始動。試行錯誤を経て、独自の燃焼構造「サイクロンチューブ」を設計し、特許を申請。「ヒミエルストーブ」とは「火がよく見えるストーブ」から。